

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町10番地

TEL:075-211-7277

FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

総合社会福祉研究所

2024年度会員のつどいのご案内

日頃より総合社会福祉研究所の諸活動にご協力たまわり、感謝申し上げます。2024年度の会員のつどいを、下記の通り開催いたします。会員のみなさまには、8月初旬に議案書および会員のつどいの案内文をお届けいたします。ご参加いただける方は、下記のQRコードよりお申し込みをお願いします。

日時：2024年8月31日（土）

10時～11時45分

場所：立正大学品川キャンパス



総会后、13時より開催される研究交流集会にも、ぜひご参加ください！

平和な世の中を願い、 戦争の悲惨さを伝えたい

みまさか

～岡山県津山市・美作大学沖縄県人会の創作劇「時をこえ」～



沖縄戦末期、米軍の「鉄の暴風」が吹き荒れるなか、ひめゆり学徒隊に「解散命令」が出されました。家族がどこにいるのか、家がどうなっているのかわからない戦場に放り出されることになり、絶望した生徒は、「どうせ殺されるなら、私はここで死ぬ！」と、日本軍から渡された手榴弾を爆破させ「自決」しました。



生き残り、米軍の捕虜収容所にたどり着いたアイ子に、母と兄が銃撃され、亡くなったとの知らせが。アイ子は2人が亡くなったことが信じられず、形見の三線さんせんをすぐに受け取ることができませんでした。アイ子の兄は足が悪く、避難したガマの中で戦地に行っていないことを責められ、母とガマを出たところで撃たれたのです。



生き残ったアイ子は、『慰霊の日』に、孫にそんな壮絶な体験を話しました。障害者である兄が責められたこと、追い詰められてみずから命を絶ったり、家族で殺し合ったりした人がいたことを聞いた孫は「戦争になると、人って変わっちゃうんだ、こわい」「アイ子おばあ、生きててくれてありがとう」と。「戦争は人を苦しめ、幸せな日々をうばう」「戦争の悲惨さを忘れないために、『慰霊の日』は大切にしないといけないんだよ」「あたり前の日々に感謝して、戦争のない、平和な沖縄を守り続けて。命を大切に、命ぬちどう宝」と顔をあげ、きげんと話すアイ子。



劇のフィナーレは、実行委員会総出の勇壮なエイサーが披露されました。

実行委員長の^{おもしろいの}大城里音さん（2年）は、「沖縄から遠く離れたここ津山の地から日々感じる幸せを噛みしめ、（中略）二度と戦争が起こらないよう願います」とあいさつしました。

※本文トピックス「『慰霊の日』を知っていますか」でも紹介しています。

（写真・主催者提供、文・中島素美）

●特集● 社会福祉のあゆみから、戦争と平和を考える

戦時厚生事業を断ち切り、民主化を推し進めたちから	寶 徳左	12
原点に立ち戻る 子どもの今と未来をどう守るか	高橋 利一	16
希望や目的をもって社会で生きていく力を	福田 茂雄	20
平和を守るために学び続けよう！	三村 正弘	22
戦争の傷痕に痛みながらも平和のために歩む	山田寿美子	24
二度と戦争孤児がうまれない世界へ	浅井 春夫	26
～子どもへの無関心の国のなかで私ができることを考え続ける～		
「戦争への道」を選ばないために		
——戦争と社会福祉事業の歴史に学ぶ	瀬瀬厚・永岡正己	32

●トピックス●

「慰霊の日」を知っていますか～受け継がれる沖縄の思い～	中島 素美	40
働かざるをえない状態に追い込まれている日本の高齢者の現実	河合 克義	44
青木道忠さんを偲んで		48

●連載●

なかまと職員と家族と、ともに築く暮らしの場		
私の人生はダウン症の次男とともに激変！！	安藤美知子	52
続・ヘルパー歳時記 たかが掃除、されど掃除①		56
WORK WORK——わくワク—— あかねの会就労支援室		
バランスの良い食事のお手伝いをしたい野菜たっぷりスープ		60
JOB&ACTION 全国福祉保育労働組合 (41)		
団体交渉実施にこだわった24春闘がもたらした変化		62
私の履歴書 社会福祉経営全国会議 (41)		
今こそ「共に育つ」を問い直す	山本 耕平	64
阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎 (61)	水野阿修羅	66
育つ風景 Rちゃんのふりかけ	清水 玲子	68
映画案内 『魔女の宅急便』	吉村 英夫	70
現代の貧困を訪ねて	生田 武志	72
フィリピン・セブ島の貧困地域を訪ねる (その3)		
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート		
100回記念企画の発表じゃ～！	ラッキー植松	74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜	76
花咲け！ 男やもめ	川口モトコ	77

●表紙の絵●
神門やす子



お知らせ 第29回社会福祉研究交流集会 in 関東 38

みんなのポスト 50/福祉の動き 78/今月の本棚 81

●グラビア● 平和な世の中を願い、戦争の悲惨さを伝えたい
～岡山県津山市・美作大学沖縄県人会の創作劇「時をこえ」～

南西諸島で進む 「ミサイル要塞化」

——住民を捨て石にした沖縄戦の再来か？——

みやこ9条の会事務局長 上里 清美

「台湾有事は日本の有事」だと政府は言います。もし中国が台湾を攻撃するような事態が起きれば、米軍と一体に中国に対し武力行使も辞さない、と勇ましい。与那国島、石垣島、宮古島、うるま市、奄美大島に陸自ミサイル基地が強行配備されました。宮古島には本土復帰の一九七二年に野原岳の米空軍レーダー基地を引き継いで「航空自衛隊宮古島分屯基地」が置かれていました。二〇一五年、「陸自基地を配備する」と市に打診があり、住民が反対するなか、二〇一七年から工事を開始、二〇一九年に陸自宮古島駐屯地開設、二〇二二年には保良訓練所が開設されました。現在、空自基地に二〇〇人、陸自駐屯地に警備部隊三八〇人、ミサイル部隊四〇〇人が配備され、さらに今年度中に電子線部隊五〇人を配備予定で、計一〇〇〇人以上の隊員が配備されています。ミサイル車両を含む軍用車両、最新鋭レーダー、弾薬庫、射撃訓練所が置かれ、公道を軍用車両が走り回り、基地ではミサイル発射訓練がおこなわれています。

二〇一五年に宮古島への陸自配備が打診されたとき、防衛省は住民に「弾薬は置かない」「ヘリは飛ばさない」と説明していました。しかし「南西諸島は防衛の空白地帯であり、敵（中国）が攻めてくるかもしれない」と住民を煽り、「基地があれば攻撃の対象になる」と危惧する住民に、「基地があれば抑止になって攻撃してこないのが安心」と説明しました。二〇一九年の駐屯地開設式典では、造らないと約束した弾薬庫が置かれ、危険な弾薬が搬入されていることが判明しました。翌日、国会で大臣が謝罪し、「後日、弾薬は撤去した」と答弁しましたが、いまだに弾薬庫の入口にはもともと危険度の高い弾薬が入っていることを示す火災標識が置かれています。保良訓練所は、保良集落から二〇〇メートルほどしか離れておらず、そんな場所に弾薬庫二棟が置かれ、現在、



うえごと きよみ

宮古島の野原岳米レーダー基地のある野原集落で生まれ育ち、現在も宮古島在住。平和で静かな島を子どもたちの未来につなぎたいと活動しています。「ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会」共同代表、「みやこ9条の会」事務局長、「『慰安婦』問題を考える宮古の会」代表、沖縄医療生協宮古支部。

さらに一棟を建設中です。

集落住民は、「弾薬を抱いては眠れない」と、毎日抗議のスタンディングをおこなっています。中国を牽制するアメリカの戦略により、米軍の指揮下で自衛隊は米軍と一体となって訓練をおこなっています。米軍と自衛隊が一体に訓練しているのは、「離島奪還作戦」です。いったん敵に島を占領させたあとに、海と空からミサイルをぶち込んで敵を殲滅^{せんめつ}させ、海岸から水陸両用車で上陸し、島を奪還するというとんでもない訓練をおこなっています。

その時、私たち島の住民はどうすればいいのか？ との住民の声に、政府は国民保護法で、離島住民を一週間程かけて、船や飛行機で九州に避難させるとの計画を作成しました。「危険でとうてい住民避難は無理だ」との住民の声に、今度は地下シェルターを造り避難させると言い出しました。宮古島の人口五万五〇〇〇人を全員避難させるシェルターを造ることなんて不可能です。戦前のように島中に地下壕を張り巡らせるつもりなのでしょうか？ それで住民は守られるのでしょうか？ 戦争はいつ終わるのか？ 食糧は確保できるのか？ シェルターは安全なのか？ ウクライナやガザの戦争を見ると、とても安全な避難は無理だろうと思えます。米軍の指揮下で台湾有事を煽り、沖縄の島々を再び戦争にまき込む計画が強行されています。

沖縄戦の教訓は、「軍隊は住民を守らない」「基地は攻撃の対象」「命こそ宝」です。日本政府は憲法九条を守り、「紛争は話し合い、外交で解決する」ための努力を強めてほしいです。私たちは、戦争を準備する政治を決して許さず、憲法九条を選択する一人ひとりになろう！

社会福祉が二度と戦争に組み込まれないために

「戦争の放棄」をうたう日本国憲法を有する日本が、どんどん「戦争をする国」に近づいています。戦争を経験していない世代の人は、日本がいつでも戦争ができよう、現実に次々と法律が改定・制定されていっても、それは戦争をしないための抑止力であって、実際に自分たちの生活に戦争が近づいているわけではないと思っっているかもしれません。攻撃を受け壊滅状態にあるウクライナやガザの状況を見ても、死者が何万人と聞いても、医療が届かないと訴える現地の人々の声を聞いても、ひどいと思いつつ、なかなか自分ごととして捉えられない人も多いのではないのでしょうか。

しかし、ウクライナやガザの状況は、七九年前の日本と同じ状況です。八〇年たって、日本もおなじような状況にはならないと言い切れるでしょうか。残念ながら、いまの日本の法律では、日本は戦場にならない、日本は戦争をしない、ということは日に日に言い切れなくなっています。今号のトピックに登場してください。上里さんの報告が、まさにそのことを物語っています。

社会福祉は、人々のいのちと生活を守り、人権を尊重することが最大の目的であり、戦争とは対極にあります。しかし、過去、社会福祉の前身である「社会事業」が、「戦時厚生事業」として戦争に組み込まれ、加担してきた歴史があります。それは特別なことではなく、世界中で起きてきたことです。目の前の困っている人を助けるという社会福祉の性格上、再び戦争が起きれば、同じことがくり返される可能性は大い

にあります。

本誌の発行元である社会福祉法人大阪福祉事業財団のはじまりは戦時厚生事業の実施であり、以降、管理統制の厚生事業から決別し、民主主義と人権を守る社会福祉をめざして、実践を積み重ねてきました。児童養護施設の多くも、戦後の戦災孤児・浮浪児の收容を目的にスタートしています。多くの社会福祉法人・団体が、銃後を守る戦時厚生事業や、戦争のあと始末の役割をもってスタートし、そのなかで、戦争がいかに人権を侵害する行為であるかを確信し、二度と同じことをくり返してはいけなさと、「平和なくして福祉なし」を掲げてきました。

今号の特集では、社会福祉事業をおこなう団体自身が、戦中・戦後にそのルーツをもち、戦争と深くかわっていることをふり返りながら、いま一度、「福祉と平和」について考えたいと思います。戦災孤児・原爆孤児として、実際に戦後の社会福祉事業とかわってこられた当事者の方にも、お話をうかがいました。

特集では、社会福祉経営全国会議の主催で開催されたトップセミナーでの、こしげつ 瀬瀬厚さんと永岡正己まよみさんの講演の一部も紹介しています。お二人が強調されたのは、戦争は国民が気づいたときにはもう後戻りできないところにいるのだということ、一度戦争になったら社会福祉はその体制に組み込まれていくということ、そして、戦争を止める一番の方法は戦争を未然に防ぐことだということです。

いのちを守り、生活を守り、人々の尊厳を確立していくことが、私たち社会福祉にたずさわる者の仕事です。それらが守られない人たちの苦難や思いを知る私たちだからこそできること、しなければいけないことを、考えたいと思います。

(編集主任 申)